

中国青瓷の研究: 編年と流通

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32076

氏名	森 達 也
生年月日	
本籍	
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	人博乙第7号
学位授与の日付	平成24年3月22日
学位授与の要件	論文博士（学位規則第4条第2項）
学位授与の題目	中国青瓷の研究 ―編年と流通― (A Study of Chinese celadon: chronology and distribution)
論文審査委員	委員長 高濱 秀 委員 藤井 純夫, 中村 慎一 鏡味 治也, 森 雅秀

学位論文要旨

中国では、遅くとも紀元前16世紀頃までに灰釉の施された原始青瓷が誕生し、紀元1世紀頃には完成された青瓷が生み出された。これは、世界で最も古い高温焼成施釉陶磁の系譜であり、今日世界中で生産されている「瓷器」すべての技術的ルーツといっても過言ではない。

特に、8世紀後半以降には、中国青瓷は盛んに海外に輸出されるようになり、世界各地の窯業に大きな影響を及ぼした。8世紀から15世紀頃までの、中国青瓷の出土や伝世は東アジアから西アジア・地中海東南部、アフリカ東岸にわたる広い地域で知られており、東西交流を裏付ける重要な資料として、また、各地の遺跡の年代決定材料として重要な意味をもっている。

本論文は、中国青瓷が最も盛んに輸出された8世紀後半から14世紀に焦点をあてて、該期の輸出青瓷の代表的な窯である江南の越州窯と龍泉窯青瓷の編年を構築し、世界各地で遺跡の年代決定の基準資料として用いられているこれらの中国青瓷の詳細な年代位置付を明らかにして、その研究に資することを第一の目的とする。

また、越州窯および龍泉窯と密接な関係をもつ華北の耀州窯と汝窯、江南の南宋官窯青瓷を取り上げて、それらの影響関係と意匠・技術の変遷を明らかにし、越州窯青瓷から南宋龍泉窯青瓷に至る意匠・技術の系譜を明らかにすることをもう一つの目的とする。

具体的には、唐代晩期から南宋初期（8世紀から12世紀）の越州窯青瓷、南宋後期から元代後期（12世紀から14世紀）の龍泉窯青瓷の詳細な編年を確立し、その技術的・形態的変遷を明らかにするとともに、耀州窯、汝窯、南宋官窯など、越州窯・龍泉窯との関係が深い窯の製品の編年や技術・意匠の系譜を考察し、各窯間の影響関係を探り、さらに、青瓷を中心とした該期の中国陶磁の流通についても考察を加える。

「第1章 問題の所在」では、まず研究資料としての中国陶磁の特性を①保存性、②斉一性、③階層性、④広域流通、⑤意匠的影響、⑥技術的影響、⑦文様・器形における嗜好・美意識の表現に分けて簡単にまとめ、さらに本論文での研究内容と目的を明らかとした。

「第2章 越州窯青瓷の編年」では、8世紀後半から12世紀前半にわたる越州窯青瓷の編年を詳細に検討した。編年の基軸には青瓷碗の支焼技法や形態の変化を基にした時期区分を置き、約4世紀にわたる期間を、10世紀前半を境に大きく2時期に区分し、さらにそれぞれを4つの小期に分けて、全体で8つの小期に細分した。碗以外の器種もこの時期区分にあ

わけて器形や支焼技術の変化を明確化した。

「第3章 五代・北宋耀州窯青瓷の編年」では、五代から北宋、金代に亙る耀州窯青瓷の編年を、紀年墓や窖藏出土の一括資料などを中心に確立し、これまで五代とされた一群の青瓷が北宋前期まで時代が下がることなどを明らかにした。また、五代耀州窯青瓷では、暗灰色の素地に白化粧土をかけ、その上に青瓷釉をかける技術が主流であったが、北宋初期の段階に灰白胎土の上に直接青瓷釉を施す技術へと移行し、さらに北宋前期に焼成が薪燃料から石炭燃料へと移行し、オリーブグリーンの北宋耀州窯青瓷の様式が確立したことを明確にした。

「第4章 汝窯と南宋官窯—技術と器種の比較—」では、耀州窯の技術や意匠の影響を受けて創生された宋代青瓷の最高峰である汝窯天青釉青瓷が、宋王朝の南遷によって創設された南宋官窯に大きな影響を与え、さらに龍泉窯などの民窯や海外の高麗青瓷にまで影響を及ぼし、東アジアの陶瓷器生産の大きな画期を生み出したことを明らかとした。特に、汝窯と南宋官窯で古代の青銅礼器を写した新たな器種が生み出され、その後の中国陶瓷器の器種構成の中で極めて重要な位置を占めたという問題の定義は重要である。また、北宋の汝窯では戦国後期や漢代の青銅器の模倣を主に言い、南宋官窯になってから商周代の古い青銅礼器の模倣が始められたことを明らかとした。

「第5章 南宋官窯（老虎洞窯）出土青瓷の編年」では、近年修内司窯である証拠が発見された杭州・老虎洞窯で出土した廃棄坑から一括出土した青瓷を分析し、この地で南宋前期から元代まで継続的に青瓷生産が行われていた可能性を指摘した。ただし、この分析は現時点で発表されている資料のみを用いた不十分なもので、本報告の出版を待って、再度分析する必要がある。

「第6章 宋・元代龍泉窯青瓷の編年」では、宋代中期から大発展をとげ、元代には景德鎮窯とともに中国を代表する窯業生産地となった龍泉窯を取り上げた。四川省の窖藏から一括して大量に出土した資料や、日本の出土品、韓国・新安沈船の引き揚げ品など、大量の一括資料を比較し、その器形の変遷を明らかにした。具体的には、13世紀初頭から14世紀中頃までの龍泉窯青瓷の器形や焼成技術の変化を、①南宋後期（13世紀初頭から1260頃）、②南宋末・元初期（1260年頃から13世紀末）、③元中期（14世紀初頭）、④元後期（14世紀中葉）の四段階に区分して、粉青色青瓷（砧青瓷）の出現から、元様式の大形器種の出現までの過程を明らかとした。

「第7章 中国陶瓷器の輸出」では、第1章から7章で構築した青瓷の編年を基に、唐から元代にかけての中国陶瓷器輸出港の変遷を明らかにし、中国陶瓷器の輸出ルートや生産地の変遷について考察を行なった。第5節では、特に中国陶瓷器の日本への輸出ルートについて考察し、南宋代に、福建、琉球列島、九州を結ぶ貿易ルートが存在した可能性を指摘した。また、元代においては、寧波から輸出される中国陶瓷器と泉州から輸出される中国陶瓷器に組成の差が認められ、寧波からの輸出品には龍泉窯青瓷、景德鎮窯白瓷を中心に華北、華南各地の窯の製品が少量ではあるが含まれるが、泉州からの輸出陶瓷器は、龍泉窯青瓷、景德鎮窯白瓷、福建産陶瓷器が大部分を占め、他産地の製品は極めて少ない事を指摘した。

「第8章 青瓷輸出の終焉—15世紀後半から17世紀の中国貿易陶瓷器」では、第8章では、15世紀末から18世紀の中国貿易陶瓷器の生産と輸出について考察し、中国青瓷輸出の終焉期の状況を明らかにした。龍泉窯青瓷の輸出は16世紀初頭を境に急速に衰退し、替わって輸出された青瓷の大部分は、景德鎮窯の倣龍泉窯青瓷であったことを指摘した。

本論文の第2章で詳細な編年を行った越州窯と第6章で取り上げた龍泉窯の製品は盛んに海外に輸出され、その遺品は世界中で確認されている。本論文で試みた、両窯の製品の詳細な編年は、中国国内はもとより、海外に渡ったこれらの陶瓷器を研究し、東西交流や技術交

流などの研究のための基礎的な資料認識のために有用となることが期待される。

また、単に編年作業を行うだけでなく、両窯の技術や意匠の発展が連続的なものではなく、両窯の技術・意匠の間には耀州窯、汝窯、南宋官窯といった多くの窯が介在しており、中国大陸の南北を通じた、ダイナミックな技術・意匠伝播によって繋がれていたことを明らかにし、中国陶器史の大きな流れを考えるうえで重要な問題提起を行った。

さらに、宋元代の貿易陶器の産地と輸出港についての考察では、宋元代の主要な貿易都市である泉州と寧波から輸出された陶器の組成に大きな差があることを明らかにしたが、これは当時の陶器貿易の状況を理解する上で極めて重要な指摘であると考えている。

Abstract

The main aim of this dissertation is to consider the transition in the styles of Yue kilns celadon and Longquan kilns celadon from the late Tang dynasty to late Yuan dynasty. Owing to typological comparison of many objects excavated from dated tombs, sites of underground depository, kiln sites and shipwrecks, a precise chronology has been constructed.

The second aim of this dissertation is to consider the relation of technique and design among Yue kilns, Yaozhou Kilns, Ru Kilns, Southern Song Guan Kilns and Longquan Kilns. Owing to comparison of technique and design, Yaozhou kilns are considered to be important links. In the Five-dynasties period Yaozhou kilns started to produce high quality celadon by copying Yue kilns celadon. In the Northern Song dynasty the technique and design of Yaozhou kilns celadon influenced many kilns in Henan area, and in the late Northern Song dynasty Ru kilns in Henan area started to produce Ru ware by copying Yaozhou kilns celadon of Five dynasties. Owing to the collapse of the Northern Song Empire the technique and design of Ru kilns were transferred to Southern China area and Southern Song Empire founded Southern Song Guan kilns in Hangzhou in the early Southern Song dynasty. The technique and design of Guan kilns influenced Longquan kilns, and Longquan kilns started to produce high quality celadon by copying Guan kilns celadon at late 12th century to early 13th century.

論文審査の結果の要旨

森達也氏の論文は、8世紀後半から12世紀前半にわたる越州窯青瓷、五代から金代にわたる耀州窯青瓷、宋代の汝窯・南宋官窯、そして龍泉窯青瓷に至る、中国青瓷の詳細な編年・系譜を明らかにしたものである。またそれをもとにして唐代から元代にいたる中国青瓷の輸出の状況や、その終焉について述べている。

越州窯青瓷については、玉璧高台と輪高台の2種の碗を基準として、重ね焼きの技術の変遷や形の変化から8期に分け、劃花文に着目して晩唐から北宋に至る施文の変化を明らかにした。耀州窯については紀年銘のある遼墓や、塔などの窖藏の一括資料から編年を行い、中国の報告では五代とされた一群の青瓷が北宋前期まで下ることを考察した。北宋の汝窯の製品に、焼成技術などに耀州窯との類似を認め、そのイメージを再現することを目指したと推測している。一方では、汝窯と南宋官窯の共通点も指摘している。汝窯においては漢代の礼器を模倣したものがあり、南宋官窯においては三代の銅礼器を模倣したものであることから、北宋時代においては三代の銅器を陶磁器で模倣しなかったが、南渡の後、失われた銅器の代替品を青瓷で製作しようとしたという、興味ある見解を述べている。杭州の老虎洞窯は、近年、南宋官窯の修内司窯であることが明らかになったが、その廃棄坑から一括出土した資料を分析し、南宋前期から元代にいたる編年を明らかにした。さらに四川省の遂寧窖藏で発見された大量の一括資料や、韓国新安の沈船の資料などを考察し、龍泉窯青瓷を4段階に編年した。そしていわゆる砧青瓷の盛期を宋代後期と捉えている。

これらの越州窯から龍泉窯にいたる青瓷の編年は精緻であり、現在のところ最も整ったものといえるであろう。また越州窯、耀州窯、汝窯、南宋官窯、龍泉窯と連続していく影響・系譜関係の指摘も説得力がある。

交流に関する章では、構築された青瓷の編年を基礎として、唐から元に至る中国陶瓷の輸出港の変遷を述べ、輸出ルートや生産地の変化を考察している。特に日本への主要な輸出ルートに、南宋代には福建、琉球列島、九州を結ぶものがあつたこと、元代には寧波と福州を発するルートが存在し、積載された陶磁器に組成の差があつたことを推測したのは重要であろう。終章として幾つかの沈船の資料を挙げ、龍泉窯青瓷の輸出が16世紀初頭に終息し、それ以後の輸出青瓷は、主に龍泉窯青瓷を模した景德鎮産のものであつたことを指摘した。

氏の論文は中国青瓷の研究を現在可能な最先端まで推し進めたものであり、博士論文の水準に十分達していると、審査委員全員の意見が一致した。